

八学光星は猛打で知られる。今年も夏の県大会6試合で計72得点と打撃が目を引いたが、その陰で、目標としていた「一試合4失点以内」を全試合で達成し、3年生投手陣5人の好投ぶりが際立った。仲井監督は「甲子園でも投手陣の奮起が勝敗の鍵を握る」と強調する。甲子園に臨む光星投手陣の5人は、最速145km/hの直球が武器の主戦山田、春のセンバツを投げ抜いた後藤、青森山田戦で9回1失点の活躍を見せた左腕横山海、184cmの高い身長を

# 光星 節目の夏

## 10度目 甲子園

### 継投策が勝利の鍵



甲子園での力投を誓う（左から）後藤、下山、山田、渡邊、横山海＝2日、大阪府茨木市

# 「俺が支える」各自胸に

生かした投球が持ち味の渡邊に先発が変わり、3回戦と準々決勝以外の4試合は2～5人がマウンドに立つ継投策を敷いた。仲井監督は「その日の調子と相手との相性を重視した」と説明しつつも、「今年は完投できる投手が少なかった」と本音も漏らす。

今こそそれぞれ成長したと言えるが、春先までなかなか調子が上向かなかった。その証拠に、青森山田に敗れた春の県大会初戦の先発は右脇腹を負傷していた後藤。案の定、後藤は7失点で途中降板したが、他の投手たちのショックは大さかった。「自分たちはけがをしている後藤より頼りない存在なのか（横山海）。」さうした後藤が右肘を疲労骨折し戦線を離脱。後藤は「春と夏の悔しさを甲子園にぶつけた」と治療を続けながら練習に励み、調子を取り戻しつつある。タフさを身に付けた5人の投手陣が機能したとき、光星は攻守に隙のない集団として聖地にその名をとどろかせるはずだ。（大久保拓地）

考えた仲井監督も練習試合で4人を積極的に登板させ、最適な起用法や登板タイミングを模索した。冬の地道な基礎トレーニングをこなし、基礎能力が高まってきた4人は、精神的な成長を遂げたことで制球力や変化球のキレが向上した。